

# 汚れと排除

—強迫神経症における封印された母性原理—

金山由美

Impurity and Repudiation

—The Sealed Principle of Maternity on Obsessive-compulsive Neurosis—

KANAYAMA Yumi

「汚れ」や「汚れたもの」への嫌悪、及びそれらを排斥しようとする動きは、人間の基本的行為のひとつである。入浴、洗濯、掃除、ゴミを捨てる等々、日常生活の中でそういった行為はいくつでも挙げることができるだろう。更に、日常に限らずとも、対人関係、社会生活、宗教儀式等、広い領域にわたってこの「汚れたものの排除」は様々な様相で現れてくるのである。こうしてみると、「汚れたものの排除」は人の生活のあらゆる領域に関わっていると考えられるが、そこには何らかの共通なルールがあると思われる。文化人類学者の M. ダグラスによれば、汚れとは、「絶対に唯一かつ孤絶した事象ではありえない。つまり汚れのあるところには必ず体系が存在するのだ。秩序が不適当な要素の拒否を意味する限りにおいて、汚れとは事物の体系的秩序づけと分類との副産物なのである。」<sup>2)</sup> という。「食物はそれ自体では汚くないが、調理器具を寝室に置いたり、食物を衣服になすりつけたりすることは汚いことなのである。……戸外で用いるべきものを室内にもちこんだり、二階に置くべきものを階下に下ろしたり、上衣を着るべき場合に下着でいたり等々のことは汚いことなのである。」<sup>2)</sup>

以下、この様な定義に従って、「汚れ」を考えてゆきたい。

## 1. 汚れをめぐるダイナミズム

さて、通常我々が何らかの「汚れ」に遭遇した場合に生じる反応を考えてみる。先ず起こってくるのが、大なり小なりの嫌悪感であろう。そして、その「汚れ」を手持ちの排除の論理でもって取り除く。これで一件落着である。あいにく個人の力で太刀打ちできない類の「汚れ」であれば、何らかの集団や社会が持つ排除の理論や宗教の持つその力を借りて、排除するのである。この「排除が無事完了する」ということの中には、主体が意識するしないにかかわらず、あるひとつの体系のアイデンティティーの確認、強化という側面が含まれている。如何に烈しい嫌悪感を抱かせる汚れであれ——寧ろ、そうであればある程——それを排除し終えた後の満足感、手応えの大きさを、我々は皆、経験的に知っている。

しかし、こういった嫌悪→排除の図式で単純に処理してしまえない場合もある。あるいは、一旦は排除したもののそれで嫌悪感のカタルシスが完了せず、嫌悪→排除の図式を憑かれた様に繰り返さなければならない類のもの、等々…。いずれにせよこの様な時、主体にとって汚れは単に清潔さ、健康さ、場にあっている、といったことの欠如ではなく、自らのアイデンティティー、

秩序、体系をかき乱すものとなるのである。

汚れが、上記の様な様相を帯びてくる時、それはもはや先に述べた様な汚れのあり方と趣を異にしてくる。というよりも寧ろ、秩序が成り立つ以前の混沌とした状態から抜け出すべく、個人や社会の秩序が生じてくるのであるから、汚れが汚れとして排除できない状況とは、ある体系に含まれるものと含まれないものとの間の境界が極めて曖昧になる状態といえよう。当然、主体はそのアイデンティティーを脅かされ、両義的でどっちつかずな状態——秩序が成り立つ以前の混沌状態——へと引きずり降ろされてしまうのである。

こうしてみると、汚れとは、その名の通り極めてネガティブな色付けをされ、生じてくるやいなや葬り去られる場合が多いという宿命を担っている一方で、秩序や体系が成り立つためには絶対不可欠な要素であるという、非常にアンビバレントな性格を持っていることがわかる。汚れが汚れとして排除できなくなれば、イコール体系の崩壊であり、そのような事態に陥ることは絶対に避けなければならない。しかし、体系が自らのアイデンティティーを確認・強化するためには、何らかの汚れを必要とせざるを得ないのである。従って、汚れの発生、そして排除の舞台となる体系の境界部は、常にその体系の最前線として、非常に不安定かつ危険を秘めた場になってくると考えられる。そのため、仮に社会的秩序を例に考えるなら、様々な宗教儀式や通過儀礼が文化的防衛装置として開発され、境界をめぐる極めて不安定な状況に形を与えることで不安感を中和し、秩序の崩壊を防ぐのである。

## 2. 個人における汚れのダイナミズム

汚れと体系との間で繰り広げられるアンビバレントな力動について、主に一般的な視点から述べてきたが、一個人のアイデンティティーについても同様の事態が考えられよう。そして、先に述べたような、汚れが汚れとして排除できなくなる状況も又、同様に起こり得るのである。個人のアイデンティティーがこの様な形で危機に陥る典型的な例の一つに、強迫性障害と呼ばれる一群の神経症がある。DSM—III—Rによれば、強迫性障害とは概ね次の様に定義される。

①反復的な観念、思考、衝動、心像または行動である。

②患者はこの観念を抑圧しようとしたり、または行動により中和あるいは予防しようとする。

しかしその観念と行動の間には現実的な関連はない。

③患者は、その観念が自分自身の心から生じたものであり、外部から強制されたものではないとの認識がある。あるいは自己の行動が過度で不合理であるとの認識がある<sup>9)</sup>。

強迫神経症患者におけるこのような反復、固執に何らかの象徴的意味を読み取ろうとするアプローチは既にならかなり一般的なものであり、それらの共通認識は概ね次のようなものである。

「強迫神経症の儀式的行為は、未開社会の人達が発展させたタブーや儀式と同様に、みえない力に対する防衛的手段である。しばしばみられる強迫的行為は、手を洗うことなどであるが、この行為は象徴的な意味を持っている。洗い清めるとか罪滅ぼしをするなどによって不安を和らげようとしている。」<sup>7)</sup>

強迫神経症の症状は種々多様であるものの、そこに何らかの清めや贖罪的な色あいが認められるという点が、特徴的である。少なくとも「～をすれば(あるいは、しなれば)不安な心理状態に陥らずにすむ」ということである以上、「～をする(あるいは、しない)」ことが患者のアイデ

ンティティを守るための(少なくともその時点では)唯一の手段であることには違いない。但し、決してそれが本質的な解決策でない事は、何度繰り返しても不安解消が完了しない点から明らかであるが。

繰り返して言えば、強迫神経症患者においては個人を成り立たせている体系に何らかの異変が生じており、異変が起きたサインであると同時に異変に対する防衛戦略として、主に体系の境界部を舞台に症状が形成されると考えられよう。

では、そこで生じている異変とはどのような様な性格のものなのであろうか。

### 3. 強迫神経症者を脅かすもの

汚れが汚れとして排除できなくなる状況＝ある体系に含まれるものと含まれないもの間にひかれた境界が曖昧になり、必然的にその体系の存続が危うくなる。こういった事態が一個人において生じるということ、どのように捉えればいいのか。

一口に個人の人格を成り立たせている体系といっても様々な側面が考えられるが、人を他の諸動物から大きく分かつものはやはり言語の使用に代表される象徴秩序の獲得であろう。個人における自然から文化への移行は、社会におけるそれと同様に、象徴秩序への参入ということなしにはあり得ない。この、個人の主体が象徴秩序のうちに確立される場をラカン、Jは「象徴界」と呼んでいる。象徴界への参与が不可能となる場合がすなわち精神障害の発現とみなされるのであるから、個人の人格が成り立つ上でこの事がどれ程大きな意味を持つかは、明らかであろう。ではこういった秩序の存在が危うくなった場合、人はどのような混沌状態へひきずりこまれる危険に曝されるのであろうか。

象徴界参入への契機をエディプス・コンプレックスにおく考えは、フロイト～ラカンにより既に強力に理論化、モデル化されている。ラカンの図式によれば、母と一体化していた幼児は父性的なるもの(＝象徴秩序)の第3項の介入によって、母性の支配する世界から父性が支配する文化と言語の世界へ貫入するという。ここで、象徴秩序獲得以前の世界が、母との一体感を基盤とする母性原理の世界であることが窺えるが、ラカンによればこれは「想像界」が「現実界」との間に結ぶ「想像的關係」であり、エディプスへの参入を通じて初めて言語化、表象化されるという。以下、このような母性原理の支配する世界の様相について考えてみたいが、ここでひとつ指摘しておきたい事がある。それは、強迫神経症患者にとって様々な儀式的観念や行為によって払拭しなければならぬもの、何かわからないが漠然とした恐怖の対象は、勿論忌まわしく恐ろしいものである反面、何故か彼らは繰り返しそれに出会い、接触せざるを得ないのである。それはまるで、最も忌み嫌うものには自ら求めて出会いにいっているかの如き印象を与える。「倦むことなく、まるで制御できないブーメランのように、誘引する力と反発する力の対極がそれに取り憑かれた者を文字通り自分の外へ連れ出す」<sup>9)</sup>のである。強迫神経症患者が実際どう感じているかは別としても、彼らの症状はこのように極めてアンビバレントな領域に関わっていると考えられるのである。

さて、前エディプス段階への注目は既にフロイト自身の中にその萌芽が見られるが、やはりクライン、Mの対象関係理論が最も有名なものであろう。「取り込み」及び「投射」の機制により良い対象、悪い対象が形成される妄想一分裂性態勢と、それらが統合され母親を全体像として把

握するようになる抑鬱性態勢とを区別し、理論化した功績は非常に大きい。しかし同時に、これら2つの態勢間の移行過程が必ずしも明確ではない点が批判されもしている。又、特に本稿で扱っている問題が、共同体を支える秩序の成立以前から成立へのプロセスと密接に関連している以上、クライン理論の中心的な舞台となる領域とは、いささかのズレがあるように思われる。

この、クラインにおける両態勢間の移行、及び前エディプス段階からエディプスへの移行のダイナミクスを中心的に扱っているものとしてクリステヴァ、Jの研究があるので、以下それに従ってみてゆきたい。

#### a) アブジェクト

母性的原理による父権的秩序の破壊は、クリステヴァの主要テーマであるが、この両者が接するところ、すなわち境界線上で繰り広げられる諸現象を<アブジェクション>の概念で捉えている。アブジェクションは「おぞましき」「棄却作用」等と訳されるが、主体と客体との間の不確実なあやふや状態、自と他の自己同一性の不安定な状態でもある。アブジェクションの語自体は、バタイユ、Gからの借用であり「<アブジェクション>abjectionとは単に、アブジェクトな事物を強制的に排除する行為(この行為が集団生活の基礎となる)を十分に請け合うだけの能力をもたないことを意味するに過ぎない。」<sup>4)</sup>とされている。

クリステヴァが描くアブジェクションの様相は激烈である。「ある食物、汚物、屑、塵芥に対する嫌悪感。私の身を守る痙攣や嘔吐。汚穢、掃きだめ、不浄から私を引き離し、身をそむけさせる反感や吐き気。妥協、どっちつかず、裏切りの醜悪さ。これらのものへ私を導いてゆくとともに切り離しもする、魅入られたような不意の動作。」<sup>5)</sup>

クリステヴァにおいてアブジェクト[ab(分離すべく)+ject(投げ出されたもの)]とは、究極的には母親との融合的二項関係のなかから生じるある不確定な対象[ob(前に)+jet(投げ出されたもの)]ならざる対象である。それは「もはや幼児との完全な融合的状態ではないが、この母は未来の語る主体である幼児といまだ決定的には分離していない。従ってこの母性が完全に分離するためには、幼児の側からの攻撃対象とならねばならず幼児の攻撃性がそれに対して発動されねばなりません。それゆえこの対象は幼児の欲動的反撥・棄却(reject)の場となり、嫌悪を誘うおぞましき“abject”とすらなるのです。」<sup>6)</sup>そして更に「…母が“abject”として棄却されるべく両者の間に最初の距離化が生じるには、たとえ不安定な両価的なものであれある第三者の審級が存在しなければなりません。」<sup>6)</sup>と述べている。

#### b) ナルシズム

このような原初的母性の支配する世界からエディプス参入への過程はどのように捉えられているのだろうか。クリステヴァは言葉における表象の欠落、言葉の価値への不信という事態に注目し、これを記号において記号表現(シニフィアン)/記号内容(シニフィエ)を欲動代表(=身体によって生きられた生・身体的生)に結びつける絆の弛緩であるとしている。そこから逆に、欲動とシニフィアン/シニフィエの結びつきはいつどのように果たされるのか、言い換えれば、いかなるメカニズムが欲動の運動を、意識の対象と成り得る表象のレベルへと引き上げるのか、を問うことでエディプス参入への機序を明らかにしようとしている。

ここでクリステヴァは「(ラカンによれば)記号の成立の前提となる主体—客体—言語の間の識別と、メッセージを状況に参照させつつこれを伝達する可能性は、エディプスの成就に依存しま

す。…ここで私が述べようとするのは、ラカンのエディプスではありません。私としてはそれに加えて、欲動の運動を代理表象へと記載するのは、エディプスではなくそれに先立つ一次的ナルシズムのはたらきによると主張したいのです。」<sup>61</sup>と述べ、独自のナルシス論を展開しているので、以下にその概略を示す。

クリステヴァのいうナルシズム構造(図1)はエディプス構造同様3つの要素から成り立っているが、いずれの要素もきわめて不安定なのでエディプス的な三角構造はとっていない。中央のXはナルシス的主体の場所を仮定する点であり、欲動から表象への移行が行われる点である。しかし、この点で欲動→表象へと移行するにしても、同時に表象→欲動への逆戻りの可能性も高いため、この点は非常に危ういものである。右側のP(i)は「想像的父(Père imaginaire)」「個人の先史時代の父」と呼ばれ、フロイトによれば、エディプスに先立つ「個人の最初のもっとも重要な同一化」<sup>41</sup>を向けられるものであるという。更に、①この「個人の先史時代の父」は何らかの対象へのリビドーの集中化が生じる以前の現象であるため、この原初的な父はまだ対象として機能していない。従ってこの父との同一化は「直接の、仲介なしの同一化」<sup>41</sup>である。②「父と母は、性の相違、すなわち陰茎の欠如に関して確実に知られる以前には、別なものとしては評価されない」<sup>41</sup>から、この「個人の先史時代の父」は父と母両性を含んでいる、という2点が「自我とエス」の中で述べられている。クリステヴァはこの父が、ただひとつの属性に固定化した一価的なエディプスの父と異なり、二つの性をもっているという事を強調している。最後に左側のA(bjet)は「対象以前の母」「対象性あるいは客体性の零度」であり、詳しくは(a)の項で述べた通りである。

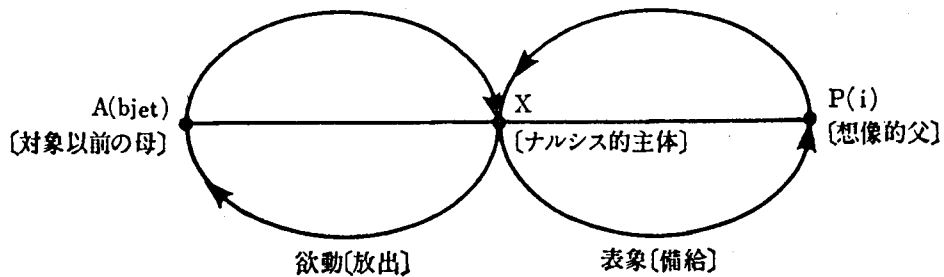


図1<sup>61</sup>

前言語的段階における自我と母との関係を断つものがエディプスの父であるとすれば、自我と“object”の関係をごく原初的な言語の中へと止揚するのが「想像的父」である。この父の重要な役割は、後にエディプスの父によって統括される意識体系の中に欲動の運動を備給することとされている。つまり、母子未分化な想像的關係がこの「想像的父」によってナルシズムからエディプスへと無事に中継されて初めて、「(エディプスの父が) 支配する共同体の論理的・超自我的実践である言語活動が、偽りの、空っぽな、去勢された、虚ろなものとなることなく」<sup>61</sup>、言葉は個々の人間に内在化された生きたものとなるのである。

c) 再び、アブジェクトとは？

こうしてみると、ナルシズムからエディプスへの移行と共にアブジェクトの形態も微妙

に変化してくるように思われる。勿論アブジェクトとは究極的には対象以前の母であり、それゆえ対象以後の我々の前に現れる時には様々な形態を取り、決して限定しうる対象にならないのは当然なのであるが。一貫して言えるのは、我々が生まれおちた時には一体であった母なる大陸は、我々の成長、とりわけ象徴機能を備えた“人間”としての発達が進むにつれて「おぞましくも魅惑的なもの (abject)」として棄て去られる、ということである。母をアブジェクトとして棄却する行為が象徴の発生に通じているのであり、「<母親>から離れること、<母親>を恐怖としてコード化する度合いが文明の尺度になっている」<sup>5)</sup>とされている。

さて、そこから離れて行くことがある意味で運命づけられており、それゆえ幼児の攻撃対象とも成るこの母なる大陸が、おぞましく忌むべきアブジェクトとしての意味づけを付されてゆかざるを得ないのは納得できるとして、一方の「魅惑的」な性格はどこから生じてくるのだろうか。

動物的な世界から文化を離脱させるべく、棄却行為(アブジェクション)をもって自分たちの文化の領域のくぎりとした我々にとって、アブジェクトとはすなわち「動物の領域をさまよう人間のあの脆く壊れやすい状態に我々を突き当たらせる」<sup>5)</sup>ものである。先にも述べたように、人間を動物から大きく分かつものが象徴機能の獲得、ラカンのいう象徴界への参入であることは間違いない。しかし一方で、人間が象徴のレベルだけで生きている訳でないのも明らかである。それは実際に物理的な肉体を持ち、食物の摂取、消化、排泄に始まる動物と同様な生理的活動をしているというレベルから、先に挙げた言葉における表象の欠如といった事態にいたるまで、様々な形であらわれている。そして何よりも、我々にとって母性から完全に切り離されてしまうことなどあり得ないのではないだろうか。

このように考えてくると、アブジェクトとは母性的なものであると同時に、人間の中にあるより生理や動物の世界に近いもの、文化の中に生きる人々が思わず目をそむけたくくなるような生命力、生殖力、繁殖力と言うこともできるように思われる。山口昌男はこれを「われわれが秩序と考えているものとは違った意味の、人間の生命力、コントロールを越えた生命力」<sup>9)</sup>と呼び、人間がこれを拒否するのは、それが人間の最も親しい部分であるにもかかわらず人間社会につながるために切り捨てざるを得ないため、遠ざけるのだ、としている。しかしこのような部分は「(排除の対象として) 一見マイナスに見えるけれども、逆に全体という立場から考えると、心理の深層の中で人間が親しく触れ合う部分であり、欠けてはならない部分であった」<sup>9)</sup>と述べている。従ってクリステヴァも言うように「母との苦痛に満ちた、だが決して完全に達成されることのないこの分離」<sup>5)</sup>というアンビヴァレンスゆえに、「おぞましくも魅惑的」という両義的性格が出来上がると考えられる。

#### d) アブジェクションと悪

しかしながら、共同体の秩序から排除されたおぞまじきアブジェクションとは、やはり社会にとって汚れ・穢れであり悪しきものなのである。だが穢れ・汚れ——不浄さ——と悪とは、はたして重なるのであろうか。この点についてクリステヴァは、キリスト教(特に聖書)におけるアブジェクションと汚れ～不浄の考察の中で次のように述べている。「聖書の見地から人が清浄であるか不浄であるかは社会秩序と対した時に、言い換えれば<律法<sup>註1)</sup>>もしくは礼拝と対したときのみ決定可能なのである。その代わりにこうした不浄性を考古学的に遡ってみると、確かにある種の潜勢力(母性的なものか、自然のものか——いずれにしても<律法>に服さず、また服し難

い潜勢力)を前にした恐怖に遭遇するのである。この潜勢力は自律した悪ともなりうるが、社会と主体のレベルでの象徴秩序の支配が続く限り、そうはならない。したがって聖書の不浄性とは常に象徴体制への違反の論理化なのであり、それ故邪悪な悪としてこの違反が現実化するのが阻止されるのだ。この論理化によって魔性は罪悪感や罪の潜在力として、より抽象的でより道徳的な因子となって封じ込められる。<sup>5)</sup>そして更に「聖書の穢れが『邪悪な勢力の現実形態』であり得るのは、預言者を通じて、以前の聖書テキストの食物嫌忌が…契約とか象徴秩序の条件に内在的なものに、変換された限りのことである。<sup>5)</sup>としている。これはつまり、聖書の中で最初の浄/不浄の二分法が次第に内部/外部の二分法へと転換し、脅威のよって来るところがもはや外部でなく内部になるという「アブジェクションの内面化」<sup>5)</sup>を指している。こうして主体の中に移された悪しきものは、「罪」という新しいカテゴリーを作る土壌となるのである。

以上のように、個人のアイデンティティーをめぐって繰り広げられる母性原理と父権的秩序のせめぎあいの様相をみてきた。「想像的父」そして「エディプスの父」によって二重に封印された原初的な母性、一個人として共同体に加わるために切り捨てて来ざるを得なかったが故に二度と目にしたくないものの、そこへの潜在的な愛着が残存し続ける母なる大陸。このようなものが象徴秩序を成り立たせている様々な境界線上に現れるという事態は、やはりとてつもない恐怖——自己のアイデンティティーを母の中へ永久に吸引されるという——であろう。

強迫症患者が直面しているのはこのような事態ではないかと思われる。そして恐怖であると同時に魅惑的という両義性から強迫症状の反復性が、又、この恐怖が象徴秩序の記号では決して名付けることのできない、対象を欠いた欲動の寄せ集めであるため、象徴界に住む我々の目には解読すべき象形文字として写る儀式的性格が、各々付与されるのではないだろうか。

一方、視点を変えれば、これと同様のことが社会の成り立ちに関しても生じている。母なる世界への回帰願望は、個人のレベルでは精神障害として現れ、秩序化された社会ではその崩壊の危機として顕在化するのである。このような「母への地滑り」<sup>3)</sup>を防ぐため、社会は様々なコード化されたアブジェクション(例えば儀式やタブーや「罪」等)を必要とし、これらを利用して自らのアイデンティティーを確認・強化し続けるのである。

#### 注

- 1) 神が古い契約において立て、キリストを通じて成就されたもの。従って律法の持つ本当の意味は、律法の成就者であるキリストの啓示の光において初めて開示される。律法は、イエス・キリストを証言するものとして、信仰生活や伝道、礼拝において欠くことのできない<聖書>とされるにいたった。

#### 文 献

- 1) Bataille, G. *Euvres complètes II*.
- 2) Douglas, M. 1969 *Purity and Danger—An analysis of concepts of pollution and taboo*. Routledge & Kegan Paul Limited. (『汚穢と禁忌』塚本利明訳, 1985, 思潮社)
- 3) 枝川昌雄 1982 「境界侵犯と排除の論理」 現代思想 Vol. 10. No. 1, 87-97
- 4) Freud, S. 1923 「自我とエス」『フロイト著作集6』井村恒郎他訳, 1985, 人文書院
- 5) Kristeva, J. 1980 *Pouvoirs de l'horreur, Essai sur l'abjection*. Éditions du Seuil. (『恐怖の権力<アブジェクション>試論』枝川昌雄訳, 1984, 法政大学出版局)

金山：汚れと排除

- 6) Kristeva, J. 1982 「愛の関係と表象」 三浦信孝訳 現代思想 Vol. 10. No. 1, 34-54
- 7) 外林大作他編 1984 『誠信 心理学辞典』 誠信書房
- 8) The American Psychiatric Association 1987 Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-III-R. The American Psychiatric Association. (『DSM-III-R 精神障害の分類と診断の手引 第2版』 高橋三郎他編, 1988, 医学書院)
- 9) 山口昌男 1980 『知の祝祭』 青土社

(博士後期課程)